

Newsletter

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

(電子版)

Nr.21

Dezember, 15. 2017

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み (11)

さて1970年代には多くの会員が属していた本協会ですが、1980年代にバロック音楽のコンサート開催の増加に反比例するように、会員数は減少の一途を辿ることになります。もっと友好を深めるための会合を希望される声を聞きながらも、有効な手段を見出せないままに年月だけが過ぎていきました。シュッツ協会の会員の証は、毎夏に事務局長からの会費支払のお願い、納入を確認したお葉書、そして本部から直接届く『ヤールブーホ』と『アクタ』と大会案内でした。そのような時に懇親会開催の通知が届きました。2000年4月3日(月)に慶応大学三田キャンパス 北新館 会議室 2 でのことでした。会員の山下道子さん、佐藤 望さんが夕食の用意などをしてくださいました。参加されたのは13名(服部幸三支部長、荒川恒子、有松清人、井形ちづる、後藤田篤夫、佐藤 望、楯 功、淡野弓子、寺本まり子、野本 元、舟橋一郎、正木光江、山下道子(あいうえお順、敬称略))でした。この年には名簿も発行されています。個人会員30名、団体会員3です。出席者13名というのはいかにも少ないように感じられます。しかし中部、関西といった遠方の会員は参加がかないませんでしたので、近隣の会員のほとんどにお目にかかれたことになります。久しぶりに支部長を囲んでの和やかな夜となりました。服部前支部長は激務の職を退かれ後、体調すぐれぬ日々を過ごしておられました。筆者の恩師にあたりますが、ほとんどお目にかかる機会がなくなっていました。ただ何をなさっても優れた能力の持主で、退職後はコンピュータを見事に操り、音楽学を専攻した若い者の行く末を見守り、新年などにはお言葉をいただき、恐縮することばかりでした。

さて当夜は特別の企画もなく、集まった方々が自由のびやかに談笑する会となりました。しかし服部前支部長にはある覚悟がおありで、この会の開催を願われたのでした。いよいよ散会という頃合いでした。支部長は「皆様にお願ひがあります」とおもむろに切り出されました。それは長らく事務の仕事一人で引き受けてこられた正木現支部長の処遇に関して、会員ひとりひとりに善処を託したいということでした。具体的にはおっしゃいませんでしたが、御自分の体調、年齢をお考えの上、これを最後と思いついて御無理を押しての参加であったはずです。私は初めてこの協会の集会に出席しましたが、久しぶりに恩師にお目にかかり、あつかましくもお隣に座らせていただき、そのお気持ちと御言葉をしかと受け止めました。そして心の中で恩師とこの世での別離を覚悟し、協会の将来への御心遣いに感じ入ったものでした。

それからまたかなり長い月日が経ちました。今から10年ほど前のことになります。正木現支部長には、確たるお考えがおありであったはずです。そのようなことには全く気が付かず、偶然お目にかかったように、上野公園を歩きながら御打診をいただきました。事務局長を引き

受けて欲しいということでした。筆者が事務局長、その他会計、広報、会計監査等の役員を置いてはどの御提案でした。どんな難しい、大変な仕事であるのか等は考えもしない迂闊者なので、即座にお引き受けしました。新しい布陣も考えてくださった正木前事務局長の長らくの御苦勞を思えば、誰かがしなければならぬ雑務は交代でやるべきであろうと考えたからです。正木支部長が私の年齢を見計らい、もうすぐ退職となる時期がくるまで辛抱強くお待ちになり、ようやくとお声をおかけくださったことなど、勿論氣もつきませんでした。

さて事務局を刷新するためには総会で会員の承認をいただかねばなりません。これは臨時総会として2007年5月5日(土) 13:30- 16:30 東京文化会館 4F 小会議室で開催されました。出席者は荒川恒子、後藤田篤夫、佐藤 望、淡野弓子、寺本まり子、正木光江、山下道子の7名でした。いたしかたないことですが、前回の総会から経過した7年の間に、3名の会員は御逝去され、全部で9名の会員が協会を去っておられました。なお当時の個人会員は24名、団体会員は3です。この会は全体で2部に分かれておりました。前半は総会、後半は淡野弓子さんが「2006年の待降節における東京シュッツ合唱団第5回ドイツ演奏旅行—ドレスデン・プロリス、ライピツィヒ、ハイルブロン」を、音と映像を操作して御紹介くださいました。各地での公演や練習、歓待や交流の状況を詳しく御説明いただき、楽しいなかにも深い感銘を覚えた一時でした。

総会においては大きな相談が2件ありました。ひとつは会費値上げという難しい問題です。ユーロの急上昇と送金手数料の値上げにより、従来の会費では支部会計のやり繰りがつかなくなったのです。国際的な協会や学会は小規模なものであっても、世界の動向の影響を諸に被るということを、切実に感じさせられました。将来の見通しはつかないままに、最小限値上げをすることにしました。

ドイツ本部学生会員会費	EUR 15	日本支部会員会費	2,500 円	→	3,000 円
ドイツ本部個人会員	EUR 25	日本支部会員会費	3,000 円	→	4,500 円
ドイツ団体会員会費	EUR 30	日本支部団体会員会費	4,200 円	→	5,000 円

1ユーロをなんと165円と換算すべき時代に突入したのです。幸いにしてその後はレートの上昇は収まり、安定した会計となっております。この会費値上げにより、退会を余儀なくされた方はおられず、ほっといたしました。

もうひとつの重要な問題は、正木前事務局長からの御提案でした。1967年から1人で守ってきた事務局長の職務を退き一介の会員になりたいこと、今後は事務局長、会計、広報、会計監事といった具合に職務を分担して、皆様で運営にあたって欲しいとの申し出でした。すでに荒川へは事務局長就任の打診をいただいておりますし、その他の役職に関しても、適当な候補を考えておられました。そこまでは皆様から直ぐに合意をいただくことができました。ただ荒川がどうしても納得ができないことがありました。それは正木前事務局長が平会員になるということでした。それでは2000年の総会において、服部幸三前支部長が私達に託した願いに添うことになるだろうか、と考えを巡らせました。咄嗟に思いついたことは副支部長という立場に就いていただくことでした(なお本部では副支部長という言い方ではなく、支部長代理という扱いになります)。これは名案ということで皆様から大賛同をいただき、以下のような布陣となりました。

支部長：服部幸三 副支部長：正木光江
事務局長：荒川恒子 会計：山下道子 広報：佐藤 望 会計監査：寺本まり子
(役員の任期は3年として、再任を妨げない)

事務局長としての最初の仕事は、新体制を支部長にお知らせすることでした。知らせを受け取られた支部長は心底お喜びになり、良いことを思いつけてくれてありがとう、皆さんが協力あって、協会のために働いてくださいとお返事をくださいました。正木前事務局長からは、事務引き継ぎということで、残っていた封筒、切手、印鑑等々が事務局に届けられました。今では一斉メールでお伝えするとか、電子メールに添付するとか、ラベルに住所を印刷するといった、いたって簡単な方法でお許しいただいています。情報を正確にお伝えするという目的だけでしたら、それで十分あるいはその方が良いという面もありましょう。しかし正木前事務局長が気持ちを込めて、心を込めて会員ひとりひとりに向かい合っておられたことを、改めて感じさせられた瞬間でした。

次の課題はその年2007年10月25日(木)から28日(日)にハンブルクで開催されたシュッツ・ターゲに参加することでした。それまでも『アクタ・サギタリアーナ』等を通して、ターゲやフェストが毎年開催されていることは知っていました。しかしそれらの通知は、実際になって日本に届いたり、日本支部会員はどのように関わるべきなのか等、あまり気にも留めていませんでした。またもし興味を持ったとしても、在職中はとても参加を考える余裕はありませんでした。立場を得るということは、それをきっかけに新たな世界に足を踏み入れるきっかけを与えられることを意味します。ハンブルクへは一日遅れて26日から28日まで、初参加をいたしました。正木副支部長は、私を本部役員や他国の会員に紹介なさるために、丁度2007年に出版されたバロック音楽研究会(代表 荒川)編『ドレスデン 都市と音楽』の表カヴァーを色刷りでコピーしたものを用意してくださいました。また総会において、挨拶をするように促されました。オルガン見学ツアー、コンサート、講演等、全てが親しみ溢れる雰囲気の中で行われました。家族と一緒に参加されたり、コンサートの後に他の会員と一緒に一杯飲みにいったり等々。日本では生演奏で聴くことのほとんどない曲を、様々なグループが演奏するので、何と至福な瞬間だろうか、何でもっと早くに参加を考えなかったのか残念でなりません。その気持ちを日本支部の皆様にもお知らせし、早めに年間計画にお入れいただければ如何でしょうか。何事も後先を考えずに行動に移す新事務局長は、2007年12月1日付けで、事務上の御案内とシュッツ・ターゲの報告を掲載し、「国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース①」を発行しました。それから10年の年月が経ちました。欠かさずに大会に出席し、シュッツゆかりの地をこの目で見、歩き、そこでシュッツや彼の周辺の音楽、また彼から大いに影響を受けた現代音楽を体験することを通して、自分の心や気持ちが膨らみ、机上で学んだことに、実感という肉をつけることができてきた、この協会の会員であることの喜び、大会に参加できる嬉しさを感じています。

さてこの「日本支部の歩み」は、事務局ニュースを通して毎年2回会員の皆様にお伝えする時代にかかりました。まもなく約52年におよぶ支部の歩みの記載を終えることができましょう。しかし支部には過去があるだけではありません。現在があり未来への展望があってしかるべきです。事実広報委員の佐藤 望会員の尽力により、元気な若い方が続々入会されています。その中には音楽学を専門とされる方、シュッツの音楽を好んで演奏される方等がおられます。互いの関心事を知らせ合い、協力しあいたいとの御希望をお聞きしています。今回は会員、佐藤康太さんの博士論文の要旨をお知らせしました。今回は2016年12月に、博士論文審査に合格された近松博郎さんを御紹介いたします。(荒川恒子)

J. パッヘルベルの声楽マニフィカト研究——その様式と役割に関する考察——

会員 近松博郎

ヨーハン・パッヘルベル Johann Pachelbel (1653-1706) は生涯をオルガニストとして過ごし、器楽・声楽を問わず多くの作品を残しました。彼がその両方のジャンルにおいて高い評価を受けていたことは、同郷人である J. G. ドッペルマイヤーが『ニュルンベルクの数学者および技術者についての歴史的報告』(1730年)の中で、パッヘルベルについて「教会作品においては声楽でも器楽でもこれまでにない完全さへと導いた」と述べていることからもうかがわれます。中でも彼の声楽マニフィカトは様式的に高度な円熟味を示しており、おそらくそのすべてが、パッヘルベルがニュルンベルクの聖ゼーバルト教会オルガニストに就任してから没するまでの最後の約 10 年間に書かれたと推測されています。コルネットやティンパニを伴う大規模な編成のための作品も多く、2つの合唱と2つのオーケストラのための作品もみられ、文字通りパッヘルベルの音楽創作の集大成というにふさわしいジャンルです。『パッヘルベル声楽作品全集』の刊行が2015年に完結したことにより、今後この分野の研究は一層進展するものと期待されます。本研究はパッヘルベルの声楽マニフィカト 13 曲すべてを対象とし、彼の作品の特徴を新たに浮かび上がらせようとする試みです。それとともに音楽家パッヘルベルに新たな光を当てることも意図しています。

論文の第1章では現存する複数の礼拝規定や、パッヘルベル自身がオルガニストのために書き残した『明確な指南書』を参照し、17世紀後半のニュルンベルクにおける典礼での音楽の用いられ方について確認しました。これらの資料からは、ニュルンベルクが宗教改革後も毎日ラテン語の晩課を継続したことからも明らかのように、極めて保守的な精神的土壌を保持していたことが改めて見て取れました。第2章ではパッヘルベルの声楽マニフィカトを伝える楽譜資料について述べた後、各曲の分析を行ないました。その際特に注目したのは、マニフィカトのテキストの第何節が音楽上の明確な区切りを持つかということです。また各節が独唱、重唱、合唱のいずれの形態で作曲されることが多いかにも注意を払いました。各曲の概要は表にまとめて全13曲を比較対照しやすくし、分析から明らかとなった特徴を総括しました。第3章では当時のドイツの楽譜目録を資料とし、現存しないものも含めて、パッヘルベルの時代にどのような作曲家の声楽マニフィカトがどのくらい流通していたかを調べました。イタリア人作曲家による作品、あるいはヨーハン・ローゼンミュラー Johann Rosenmüller (ca. 1619-1684) のようにイタリアで活動したドイツ人作曲家による作品が多数を占めていますが、この時代のドイツでマニフィカトの創作や流通が衰退したと考える根拠は見られませんでした。第4章では『ボーケマイヤー・コレクション』に収められた声楽マニフィカト全20作を概観し、そのうちパッヘルベルとの比較に有用と思われる作品、すなわち先述したローゼンミュラー、ウィーン時代のパッヘルベルが師事したと伝えられるヨーハン・カスパー・ケルル Johann Caspar Kerll (1627-1693)、そしてどの作曲家より多い3作が収載されているジョヴァンニ・バッティスタ・バッサーニ Giovanni Battista Bassani (ca. 1657-1716) の作品を取り上げて分析しました。これらをパッヘルベルの声楽マニフィカトと比較対照し、パッヘルベル作品の特性についてさらに考察を加えました。

作曲家としてのパッヘルベルの熟達ぶりをもっともよく示しているのは、対位法的書法が駆使されている部分、とくにフーガです。声楽マニフィカトにおいては、曲により様々な節がフーガで音楽化することが試みられ、第5節「その隣れみは代々におよびます」と第11節「御父と御子と聖霊に栄光あれ」以外はすべて、一度はフーガで作曲されています。このように同時

代の作品とパッヘルベルの作品を並べてみると、対位法的書法に並々ならぬこだわりをみせるパッヘルベルの姿が浮かび上がります。その目的は一体何だったのでしょうか。

冒頭のドッペルマイヤーの評価に立ち返れば、彼がパッヘルベルについて「教会作品においては声楽でも器楽でもこれまでにない完全さへと導いた」と述べるにあたって念頭においていたのが、こうした技術的に高度で華麗な作品群であったのではないかと考えられます。当時の音楽家にとって羨望的であった聖ゼーバルト教会オルガニストとして十分な実力を備え、また知的な労作を要する音楽作品の創作にも通暁した「学術的な音楽家」としての能力を人々に示すのに有効であったのが、対位法的書法を駆使した作品群であったのではないのでしょうか。そして実際に、彼の極めて多彩で聴き手に強く訴える声楽マニフィカトの一作一作は、当時一種の演奏会のような様相を呈していた音楽を伴う晩課の中で、会衆が求めていた純粋な音楽作品としての役割をも積極的に果たすものであったと考えられます。

第48回 国際ハインリヒ・シュッツ・フェスト

マールブルク 2017年9月21日—24日



第二次世界大戦で戦災を免れたマールブルク

総会で日本支部報告を終えた正木支部長を労うヴェルベック会長(いずれも荒川 撮影)

マールブルク大会概要

日本支部長 正木光江

今年のシュッツ祝祭は、協会名を国際と改称してから、1972年、1993年を経て3回目、シュッツがヴェネツィアへ留学する前の1年間法律を学んだマールブルク大学を本拠地として開催された。大会のモットーには、2017年10月31日が宗教改革500周年記念日であることを踏まえて、“**宗教改革時代とシュッツの詩篇曲**”が掲げられた。

9月21日(木)午後3時から大学の旧講堂で開会式。1527年にヘッセンの領主フィリップ“大胆方伯”が創立した世界初のプロテスタント大学は、マールブルクが第2次大戦中も中央駅以外は殆ど戦災を免れたために、シュッツが在籍していた時代の面影を色濃く残している。壁にはルターがこの講堂でメランヒトン、ツヴィングリらと1529年にいわゆる「マールブルク宗教会議」で論じ合った場面が描かれ、部屋に入った時の感慨は今でも忘れることが出来ない。

開会式は、マールブルク大学合唱団による J. パッヘルベルの 2 つの混声合唱と通奏低音のためのモテットの美しい歌声で始まり、ヘッセン州知事、マールブルク大学長、シュツ協会会長の挨拶、カッセルの楽長を長く務め、写譜家としても貢献した J. ホイゲル(1510 頃 - 1584/85) の 8 声部ア・カペラ作品の演奏、ミュンスター大学 J. ハイドリヒ教授の記念講演『宗教改革時代とシュツの詩篇曲』、最後に C.F. ツェルター(1758 - 1832) の、おそらく 1817 年宗教改革 300 年記念に作曲された、4 声部の混声合唱とオルガンのためのモテット《主よ、恩寵をもって我らを救いたまえ》によって終わった。開会式の演奏は、すべてマールブルク大学合唱団が披露して下さった。その後回廊でレセプションがあり、協会から大会のための、催し毎を小冊子にした資料と展示会のための見事なパンフレットが配布された。

午後 8 時からの演奏会“ヘッセンにおけるヴェネツィア”と題されて、ヘッセンに関わりのある 8 名の音楽家による、17 世紀初頭から中葉の主としてヘッセン州が所蔵するヴェネツィア派のスタイル、すなわちマドリガーレ様式、複合唱、コンチェルタート様式、などに限定された 11 曲の作品が紹介された。1. ランベール・ド・サヴォイワ(ca. 1548-1614)《シンフォニエ・サクレ》(1612)から《汝、マティアス皇帝の勝利の王国》(à 12) 2. J. A. ヘルプスト(1588-1666)《主よ、我等の主》(à 12) (ベルリン国立図書館の写本)、3. C. コルネット(1580-1635)《われらの主よ、来たりてわれらを喜ばしめよ》(à 12) (1606-1607) (カッセル図書館の写本)は 4. シュツ《主よ、いまこそあなたはあなたの僕を》(SWV 352a) (カッセル図書館の写本)は《シンフォニエ・サクレ第 2 集》(1647) 第 12 曲(SWV 352)の初期稿の自筆譜。シュツがペストのために早逝したカッセルの楽長コルネットを偲んで「シメオンのうた」と称されるルカ伝 2, 29-32 に作曲した追悼曲である。5. ヘッセン-カッセルのモーリッツ学者方伯(1572-1632)《悩みにありしとき、主に向かって(詩篇 120)》à 12 (カッセル図書館の写本) 6. シュツ《広大な海原よ、その入江に》à 8 (作品 1 SWV 19)は《イタリア・マドリガーレ》(SWV 1-19) (1611)。全 19 曲のうち SWV 1-18 は古典的マドリガーレの 5 声部書法によるが、最後の SWV 19 のみは 8 声部で、モーリッツ辺境伯への感謝を表した、おそらくシュツ自作のテキストにヴェネツィアで作曲して出版された。7. J. ローゼンミュラー(1617-1684)《聖書からの格言集 第 1 巻》(ライプツィヒ 1648)《わたしは主に依り頼む》(4vv. 2str. bc, Ps71, 1-3, Ps31, 1-6)。彼は 17 世紀後半の重要な作曲家で、1650 年代後半にヴェネツィアで学び、1658 年には聖マルコ教会のトロンボーン奏者になる。晩年ドイツへ戻り、1682 年からヴォルフエンビュッテル宮廷楽長の地位にあった。室内楽、宗教的声楽曲の両分野で活躍した。8. L. ガッレラーノ(1580 頃-1632)《ミサとコンチェルタート様式の詩篇曲》(à 3, 5 et 8) (ヴェネツィア 1629)に収録された《僕らよ、主を賛美せよ》(à 8 bc, Ps112(113))は、ガッレラーノがパドヴァの聖アントニオ大聖堂の楽長を務めていた時代の作品である。このような華やかな 8 声部のコンチェルターレ様式の詩篇曲を、ヘッセンの図書館が所蔵していることは興味深い。同じ 1629 年に、シュツはラテン語による器楽伴奏付き独唱または重唱のための劇的宗教声楽曲集《シンフォニエ・サクレ 第 1 集》をヴェネツィアで出版した。9. J. ローゼンミュラー《おお、驚嘆すべき交換よ》(出典はローゼンミュラーの前曲と同じ《聖書からの格言集 第 1 巻》(ライプツィヒ 1648))。10. クラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)のコントラファクトゥム(替え歌)。(おお、汝偉大なる主よ 0, du Mächtiger Herr) (モンテヴェルディのマドリガーレ《天も地も風も黙する今 Hor che

il ciel e la terra à 6 2 vn) (マドリガーレ集第8巻《闘いと愛のマドリガーレ》より)。ドイツ語のコントラファクトゥムの音楽は、モンテヴェルディのマドリガーレと同一である。11. シュッツ〈主をほめたたえよ。その聖所にて神をほめたたえよ〉(Ps150, SWV 38)《ダビデの詩篇曲集》(作品2, SWV 22-47)(ドレスデン 1619)。全150詩篇の掉尾を飾るにふさわしく、頌栄のみで構成されている第150篇をテキストとするこの詩篇曲は、今回のモットーの核心に迫る作品であり、シンポジウムにおいてもさまざまな問題が取り上げられた。第1節は「いずこで」、第2節は「何ゆえに」、第3-4節は「いかにして」、56節は「誰が」主を賛美しなければならないか、という4つの問いについて答えたものであり、「アレルヤ 主をほめたたえよ」は初めに8回、終りに16回繰り返される。最後は全声部が声を合わせて24声部のトゥッティで、大団円で閉じられる。初日のこの演奏会は、演奏者は言うまでもなく非常に多くの方々との協力と時間がかかっている。シュッツ祭としても珍しい、聴きごたえのある夕べであった。

9月22日(金)。2日目の午前中は、ヘッセン州立アルヒーフを会場として、シュッツの《ダビデの詩篇曲集》をめぐって、ハノーファーのB. A. シュミット氏が『音楽とルターの同一性。ドレスデン宮廷におけるM. プレトリウスとシュッツ』、マールブルク大のL. B. シュミット氏が『《ダビデの詩篇曲集》の印刷について』、フライブルク大のK. キュスター氏が『作品—楽譜—演奏。《ダビデ詩篇曲集》の周囲』と3篇の研究が提示された。午後14時から、オルガンとアルヒーフの見学のためにマールブルクから南西方40キロの修道院附属聖マリア教会のあるリッヒ Lich へバスで向かった。聖マリア教会は1510年から1537年にかけて建造された、後期ゴシック様式の清楚なルター派福音主義の教会であり、2011年に500年祭を盛大に祝ったという。アルヒーフの在庫目録も驚くべき豊かさで、目録4-11巻にはH. L. ハスラー、M. フランク、G. クローチェ、J. シュターデン、M. プレトリウス等々、7巻はラッツ、12巻はシュッツの《シンフォニエ・サクレ 第1集》が記され、これらの作品は全てこの教会で演奏されたという。目録の品々とオルガンのペダル仕様などは、一部が写真入りで小冊子にして配布された。教会におけるコンサートは、1990年に結成された古楽専門のアンサンブル・サルタレッコによるW. ウェーバー(1540-1599)2曲、シュッツ4曲、J. H. カプスベルガー(1575-1650)、G. オッター(1550-1618)、S. シャイト(1587-1654)、G. ガブリエリ(1554-1612)のシュッツによる編曲、モーリッツ“学者”伯ら、聖マリア教会にゆかりのある作品が演奏され、オルガンの独奏は教会のオルガニストChr. ベッカー氏によって、ブクステフーデ(1637-1707)の《来たれ精霊よ、主なる神よ》とS. シャイトの《第6旋法によるマニフィカト》、N. ブルーンズ(1665-1697)の《プレリュードとフーガ》が奏された。午後8時からのエリーザベト教会におけるオルガン・コンサートは、残念であったが見合わせてホテルへ戻った。

9月23日(土)。この日も日程が非常にたてこんでいた。午前9時30分からヘッセン州立アルヒーフのロビーに展示ケースが並べられ、“ヘッセンにおける宗教改革時代の音楽”と題して、資料が7つのグループに分類されていた。I. 修道院と教会における宗教改革以前の音楽 II. フィリップ大胆王治世の宗教改革時代の音楽 III. ヘッセンの教会音楽 IV. ヘッセンにおけるシュッツとモーリッツ学者方伯治世における音楽 V. 比較的小さな地域の音楽 VI. フランクフルトとダルムシュタットの音楽 VII. オルガン建造・音楽写本と楽器(これは壁に別置)。初日に配布された展示会のパンフレットの表紙には、1660年頃に画家シュペートナーが描いたシュッツの75歳頃の油彩画と並んで、30歳頃のヘッセンのフィリップ大胆方伯の色刷り木版画が

掲載されている。この二人がヘッセンに遺してくれた数々を今年のフェストで見、聴きすることができたことを今もう一度つくづく思う。金曜日につづくシンポジウムの第2部は、マールブルク大のお二人、A. トロビテウス氏の『シュッツのテキストに全力を傾けた作品概念としての《ダビデの詩篇曲》』と、ミュラー教授の『プレトリウス、ヘルプスト、シャイトの詩篇作品を反映したシュッツの《ダビデの詩篇曲集》』であった。

総会で日本支部報告のあと突然ヴェルベック会長が、52年間の協会への協力の感謝として、私を名誉会員に加えたいと発言されたので、壇上で一瞬あわててしまったが、協会や日本支部の皆様のご好意に感謝して、有り難く嬉しく、会長から手渡された美しい花束をお受けして壇を降りた。午後3時から、日本支部の皆様とタクシーで丘の上へあがり、ミュラー教授の説明を聞きながら方伯の居城とオルガンを見てまわった。

ルター派聖マリア教区教会で開かれた大会最後の夜の演奏会は、“IN ALLE WELT 世界のどこへでも” — Psalmjonglagen 詩篇万華鏡 — 宗教改革のための音楽 — と題されて、マールブルクのオラトリオを専門とする合唱団 Kurhessische Kantorei とともに、音楽総監督のU. マイバウム氏が、宗教改革500年、マールブルクのユダヤ協会700年、Kantorei25周年を祝うとともに、国際シュッツ協会48回の大会のために、ルターの宗教改革の5つの思想 — 1. 聖書にのみ 2. 信仰にのみ 3. キリストにのみ 4. 恩恵にのみ 5. 神にのみ栄光あれ — この5つの命題に沿って、合唱、重唱、独唱、独奏、重奏、合奏、即興演奏、ダンス、映像、朗読等々あらゆる手段を用いて祭りを祝おうという趣旨のもとに企画された。音楽は、C. フランク(1822-1890)の詩篇、O. ヴェッキ(1550-1606)の賛歌、5つの命題の必ず最初に歌われるのは、フィリップ大胆方伯治世のカッセルの宮廷で、トランペット奏者、楽長として活躍した、また開会式でも既に聴いたJ. ホイゲル(ca. 1510-1584/85)が作曲した詩篇歌で、その写本は現在カッセルの図書館が所蔵しており、このコンサートで500年ぶりに音が甦ったのであった。ホイゲルの他に、命題の第1はシュッツ、カルドーン(1908-1952)(ハーブ独奏)、メルロ(1533-1604)、第2はペルト(1935 -)の男声合唱、打楽器、オルガンのための《深き淵より》、第3はヴェッキ、第4はシュッツ詩篇98、第5はハスラー(1564-1612)の合唱曲であった。最後にオルガン・打楽器・コーラスの即興演奏も入った。コンサートの最後はアメリカの作曲家L. バーンスタイン(1918~1990)がイギリスの音楽祭から委嘱されて作曲した《チチェスター詩篇》で、第1部は詩篇100、第2部は詩篇23と2,1-4、第3部は詩篇131、結びは詩篇133,1をテキストとする構成によっている。

9月24日(日)は、エリーザベト教会における宗派を超えた共同礼拝で、会員の有志も練習に出てエリーザベト教会の聖歌隊と共に歌った。日本からは米沢陽子さんご夫妻が参加された。M. プレトリウス、シュッツ、H. ディストラ、J. パッヘルベルが取り上げられた。

マールブルクの丘から見渡す絶景は、52年前に訪れた時とほとんど変わっていない。連日天候にも恵まれて、日本からは7名の方々(荒川恒子、佐藤望、高橋美沙、寺本まり子、米沢夫妻、正木光江)が参加されて、よろよろとしているわたくしを支えて下さった。思い切って出てきてよかったと思うもうひとつの理由は、随分お元気になられたフレイリヒさんに、リッヒと総会の時と2度お目にかかれたことである。リッヒでは、教会の外の陽だまりで10分ほどお話しも出来た。すっかりお元気になられたお姿を、次回はずいぶん拝見したいと願っている。

国際シュッツ協会では、毎年ドイツないしはヨーロッパ各地で講演とシンポジウムのある大会(フェスト)が開かれる。私はフェストへの参加は今回が初めてであり、荒川恒子先生にはバロックをご専門とされる、ドイツの諸先生方にご紹介いただいたことを心から御礼申し上げたい。一方大会の後にはシュッツにゆかりのある土地、バート・ケストリッツ、ゲラ、ヴァイセンフェルス、ツァイツ、ドレスデンで演奏会のみのもみジークフェスト(中部ドイツ・バロック音楽主催)が開かれる。1998年に木村佐千子さんと一緒にヴァイセンフェルスで《ダフネ》の上演を聴いたのは、おそらくこうした催しのひとつであったことだろう。当時はドイツ音楽学会(Die Musikforschung)の国際大会がハレ(1日はヴィッテンベルク)であり、公演終了後電車で30分の距離をハレまで戻ったことを覚えている。

マールブルク訪問は今回が2回目である。およそ40年前、1973年から1978年まで私は同じヘッセン州の大都会フランクフルト大学の音楽学研究所に留学していた。その留学の最後の頃、1978年にこの町の大学で新バッハ協会の第53回シンポジウム「今日のバッハ研究とバッハ演奏：研究者と演奏家の対話」が開かれ、フランクフルトの音楽学研究所の学生の多くが参加(聴講)したのである。シンポジウムのテーマが、シュッツ協会と同様に演奏家の視点を含んでいる点が興味深い。まだシュトゥットガルトのバッハ・アカデミーを創立する前のヘルムート・リリング氏、そしてテュービンゲン大学のウルリヒ・シーゲルレ教授が熱く語っていた姿を思い起こす。主宰者は後にベルリン大学、そしてハーバード大学でキャリアを積まれた、シェンベルク研究で著名なラインホルド・ブリンクマン教授であった。その7年後に東京で表現主義の一連のシンポジウムで、教授の通訳をさせていただくことになるとは思ってもいなかったが。当時のマールブルクの印象は、とにかく坂の多い町ということである。会議のほかどこかを見たのか、1泊したのかさえ確かでないのは、健脚のドイツ人学生の歩みについていけず、疲労困憊したためであろう。今では下の街から上の街(旧市街：丘の中腹)へエレベーターが2か所に設置されていて、隔世の感がした。

考えてみると今回の機会にフランクフルトを訪れたのも15年ぶりで、一変した街の様子に今浦島のような気分であった。15年の間に大学キャンパスはかつての場所から北へ移転し、音楽学研究所も向かいの通りに移動、正木光江先生にご紹介したこともあり、山下道子さんもご存じの日本にゆかりのご家族が経営なさっているペンションは代変わりして、ホテルへと衣替えしていた。さて、マールブルクでの長時間の歩行を覚悟して、今回は東京からウォーキングシューズで出発した。そして平日には早朝と夕方に方伯城行きのバスの便があることを知り、オープニングの日の早朝に先ず丘の上の城に向かった。朝のひんやりした空気の中で、城のある丘の上から南東を見ると、グリム童話にでも出てきそうな市庁舎の独特な屋根が目につく。そして北東方向にはラン川が流れ、エリーザベト教会がそびえたつ。この城は1529年にルター、ツヴィングリ、メランヒトンらによるマールブルク宗教問答が行われた場所でもあり、宗教改革500周年を記念して「Bildungsereignis Reformation (教養における事件、宗教改革)」という意欲的な展示が行われていた。城内部は今日では大学文化史博物館となっていて、その中には恐らくシュッツが演奏したと考えられているオルガンも所蔵されている。今回は修復中のことで、大会の4日目に予定されていたオルガンの見学はかろうじてできたものの響きを聴くことができなかつたのは残念であった。

私の研究領域はルネサンスからバロック、さらにロマン派であるが、修士論文でジョスカン・デ・プレの詩篇モテットを研究して以来、詩篇が私の研究テーマの一つとなっている。そんな訳で、「ハインリヒ・シュッツと宗教改革時代の詩篇作品」という今回の大会テーマに心が引かれ、勤務先の大学の後期開始直後という厳しい日程にいささか良心の呵責を感じつつも、参加を決心した。オープニングのハイドリヒ教授による基調講演でも、詩篇作品の源として、ジョスカンの詩篇モテットに言及されていた。そして、ジョスカンを始めとするフランドル楽派とハインリヒ・シュッツとをつなぐ作曲家として、今回の大会の演奏会ではカッセルのヘッセン方伯フィリップ豪胆公(在位 1509-1567)の宮廷楽長であったヨハン・ホイゲル (1500/1510-1584/85 にかけての冬) に光が当てられていた。大会のシンポジウムが行われたヘッセン州立アルヒーフのロビーにおける展覧会「ヘッセンにおける宗教改革時代の音楽」でも、以下に述べていく『ヴァルディス詩篇』とそれに対するホイゲルの作曲、詩篇モテットのホイゲルによる写譜が展示されていた。

ホイゲルには宮廷礼拝堂楽団のために、他の作曲家の作品を写譜してレパートリーを作るという任務が与えられていたが、カッセルの州立図書館にはホイゲルが写譜した 12 冊の楽譜集が今日まで伝えられている。その中でも最も知られた写本 4 Mus. 24 には、私が博士論文で取り上げた 3 巻の詩篇モテット曲集からジョスカンをはじめとする 20 曲、ラッスス以前の最初の悔悛詩篇モテットサイクルなどが写譜されている。ホイゲル自身の曲も含むが、フランドル楽派の作曲家たちを中心とするこれら 106 曲の中心は 4 声であり、5 声の曲はまだ少ない。しかし、この写譜とほぼ同時期の 1539 年にカッセルの疫病蔓延に際してホイゲル自身が作曲し、オープニングで歌われた《慰めよ、我が民を慰めよ Consolamini populus meus》(イザヤ書第 40 章第 1-3 節) は、ドイツで最初の 2 重合唱による 8 声の曲である。両合唱が同時に歌う主要 4 部分はホモフォニックだが、それらに挟まれた部分では合唱が交代で歌い、後にシュッツが好んで用いるようになるエコー効果も取り入れている点は興味深い。

大会 4 日目に丘の中腹のマリエン教会で行われた音楽会には、シュッツ・フェストの演奏会であるばかりではなく、宗教改革(ルター派教会) 500 周年、演奏を担当したカントライの 25 周年、さらにはマルブルクのユダヤ教教会創立 700 年といった、複数の記念の祝賀が込められていた。全体は 5 部分から成り、各部分の冒頭には朗読(朗詠)と数世紀ぶりに復活再演されたホイゲルの《ヴァルディス詩篇》が置かれ、映像やパフォーマンスも入る意欲的なものであった。ドイツ語による韻律詩編と言うと、今回の大会の小旅行で訪れたりヒの教会でも見ることができた『ローブヴァッサー詩篇』(1573) が知られているが、その 20 年前にヴィッテンベルクで神学を学んだ牧師ブルクハルト・ヴァルディス(1490/95-1556) が全詩篇をドイツ語訳している。そしてシュッツがコルネリウス・ベッカーの詩篇を作曲したように、ホイゲルは『ヴァルディス詩篇』の全てに 4-5 声の和声付けを行ったのである。音楽会の全 5 部ではシュッツ時代の作品と現代の作品が巧みに組み合わせられていた。第 2 部では 1981 年にカッセルの教会で初演されたアルヴォ・ペルト(1935-) の《深き淵より》(詩篇 130 番) が取り上げられ、第 5 部の最後はレナード・バーンスタイン(1918-1990) のヘブライ語による《チチェスター詩篇》で締め括られた。思い切って参加させていただいた今回の大会では、ともしれば日々の大学の職務の中に消えてしまいがちであった自分の研究の原点を見つめ直すことができた。得るところの多い充実した 4 日間を過ごさせて頂いたことを、正木光江先生、荒川恒子先生をはじめ参加された先生方に心から御礼申し上げたい。

ドイツの東側に住んでいると、どうも西側が遠く感じられます。国際空港のあるフランクフルト、日本文化で栄えるデュッセルドルフ、近頃新しいコンサートホールのできたハンブルク…いずれも友人が住んでいて機会があれば遊びにいきたいと思うのですが、東から西への旅は最低 3時間以上の電車の旅を覚悟しなくてはなりません。そういうわけで足が遠のいていた西の地域でも、ハインリッヒ・シュッツ協会のイベントであればそんな心配をするどころか前のめり。友人オルガニストの旅団と合流する形で、1週間ほどの西への小旅行が実現しました。オルガン演奏会の応援としてナウムブルクとウルム、新旧の音楽仲間を訪れてシュトゥットガルト、そしてシュッツ・フェストを楽しみにマールブルクという旅程になりました。

フランクフルトから鈍行に乗り、途中列車の切り離しに注意して1時間ほどたつと、自然があつてどことなく長閑、しかし活気のある雰囲気のある街に降り立ちました。街角にたつ観光地図の主演はエリーザベト教会。駅から街の中心へと歩いていくと、清流ラーン川のほとりに大きな歴史的建築が佇んでいました。このエリーザベト教会はドイツ最古のゴシック教会として、またマールブルクで献身的に貧しい人や病気の人のために尽くした聖エリーザベト(1207-1231)の名前が冠されていることで有名です。夜にはこの教会で2006年に完成したクライス・オルガンにて、ダッセルから参加した教会音楽家フリードリヒ・フランメ氏によるレーガー、レインケン、ロイプケの演奏を聴き、これら詩篇を題材にした作品に思いを馳せました。

大学の街としての伝統が長いマールブルクでは、大学教会も非常に印象的でした。1300年に設立され、17世紀半ばに改革派教会とされたゴシック様式の荘厳なこの建物は、大学通りにそびえ立ち、少し傾斜のある坂の高みから今も市民を見守っています。土曜朝に行われていた礼拝は、重みある敬虔な雰囲気に満ちていました。教会裏をまわると、見晴らしがよく、風光明媚なマールブルクの街を臨むことができました。

ヘッセン州立アルヒーフにおける大会集会では、各支部からの報告、会計報告のほか、正木先生の協会へのこれまでのご尽力に特別な敬意を示して美しい花束が贈られました。同じくフレリヒさんが長年事務に携わられたことに、協会員一同温かい拍手で感謝の意を表しました。シュッツ協会の歴史の深みを感じた瞬間でした。

近隣のリヒヒまでバスで移動した際、偶然となりにお座りになった正木先生のお話を伺うことができました。「作品を知るということは、自分を知るということ。シュッツを演奏することを通して、自らの人となり分かるものなのです。」今数秒前に再会したばかりなのに、なんと時宜を得たお言葉だったことでしょうか。このとき、私は自分の世界観に疑念をいだいていたのです。誇張して言えば、物事の善悪すら分からなくなるような不穏なものでした。でも、それはいずれにしても私の投影なのです。つまり、目の前のことが美しくないと感じるなら、美しくないと感じているのは他でもない自分なのです。世界は自分の中身を映し出しているのだとあってくださって、その言葉が胸に突き刺さったと同時に心が軽くなりました。さて私の個人的な感想は別として、シュッツの作品群はまだまだ汲み取れるものの多い泉のように思います。

これまで自分がシュッツに関わってきたことといえば、合唱曲を歌うくらいなものでした。でもシュッツの音楽が訴えかける情感やポリフォニーの楽しみというのは、他にはない独特なものです。日本でのバロック音楽の活動を振り返ると、主流であるバッハ以外にも、多様で豊穡なシュッツの音楽がもっとたくさん演奏されてもいいのではと考えています。

レヴォチャ、バート・ケストリッツ、そしてマールブルク

会員 米沢 陽子

2017年9月10日、私はヨーロッパへと出発しました。今回の渡欧の目的は、スロヴァキアにおける調査とオルガン・コンサート、バート・ケストリッツのシュッツ・ハウス訪問、そしてマールブルク大会に参加することでした。

私は現在、2015年から3ヶ年の計画で、ザムエル・シャイト（1587-1654）の初期声楽作品『カンツィオネス・サクレ』（1620年）に関する研究をしています。この作品はシャイトが初めて出版した38曲からなる8声の二重合唱曲集です。この作品について調べていたところ、鍵盤用の筆写譜がスロヴァキア東部のレヴォチャという町の福音派教会に保存されているという情報を得て、実際にこの目で確認したくなり、今回の訪問となりました。

レヴォチャは鉄道も通っていない小さな町です。首都ブラチスラヴァからも鉄道とバスを乗り継いで6-7時間とのことで、今回はポーランドのクラコフから長距離バスを乗り継いで4時間ほどの一人旅でした。

日本では殆ど知られていませんが、レヴォチャの聖ヤコブ教会（カトリック）は世界遺産に指定された格式高い由緒ある教会です。その隣にある福音派教会の建物はそう古くなく、19世紀のものとのことです。スロヴァキアはカトリック国ですが、ドイツからの移民も少なくないそうで、ドイツ系福音派教会もあります。「シャイトの作品の筆写譜が何故スロヴァキアの端っこに??」と思つての訪問でしたが、このような事情が関係しているのでしょうか。

到着した翌日、さっそく福音派教会の牧師館を訪ねました。用意されていたのは、4冊の写本。開いてみると、どのページもびっしりと記されたタブラチュアでした。作曲者が明記されているもの、タイトルだけで作曲者が記されていないもの、インデックスがある写本もあれば、ないものもある…。この中からシャイトの作品（20数曲）を特定していく作業は、まるで宝探しのようなものでした。作曲者名がないものは、各曲の冒頭部分の楽譜が記されているSSWV（ザムエル・シャイト作品総目録）とタブラチュアとを入念に見比べていく作業です。それだけにシャイトの曲だと特定できたときの喜びときたら！ 3日間の調査ですべて特定することができました。写真撮影も許されたので（史料をデジタル化できる設備も人員も教会にはない）、必要なものはすべてカメラに収めました。シャイトのタブラチュアは原曲と同じく8声で記されています。これが実際どのように用いられたのか、鍵盤で弾かれたのか…、今後研究していきたいと思っています。

レヴォチャでは滞在中にオルガン・コンサートもさせていただきました。当初はせっかく滞在中のだからオルガンも弾きたい…というつもりで試奏を打診したのですが、コンサートが実現することとなり、9月13日に福音派教会でシャイトやバッハを演奏しました。福音派教会には楽器が2台あります。1台は推定18世紀頃の楽器（故障中）、もう1台は1930年代に設置されたリーガー社製のもの。当初、教会のHPで古いほうの楽器を見て、「これを弾きたい」と思って試奏をお願いしたのです。しかし、出発の2週間前、HPにアップされた自分のコンサート告知とオルガンの写真を見て仰天。「楽器が違う！（色は同系統）大幅に修復されたのか？ それとも2台あるのか…?」。よくよくHPで教会の歴史を読み込んでみると、2台あることが確認できました。リーガーの楽器は1本1本の笛は決して美しいとは言えませんが、それでも tutti では豊かに響き、教会の丸天井から音が降ってくる体験は得難いものでした。故障中のバロックオルガンに関して、主任牧師は「修理したいのだけどね。お金がたくさん必要

だからね。でも来年、銀行がお金を貸してくれるかもしれないんだ。そうしたら修理ができる」と話しておられました。どうか修理が実現しますように。再びここを訪れ、弾かせていただけますように…と祈りつつ、美しいレヴォチャの町をあとにしました。

バート・ケストリッツのシュッツ・ハウスも今回の旅でぜひ訪れたかったところです。私が実際に見てみたかったのは譜面台です。シュッツが宮廷礼拝堂で合唱隊を指揮している絵に描かれている、あの4面譜面台のレプリカがシュッツ・ハウスにありました。あのような譜面台は当時一般的だったのでしょうか。シュッツと同時代に同じ中部ドイツで活躍したシャイトの声楽作品を研究している身としては非常に興味あるところです。またシュッツ自筆の手紙や、当時の楽器、社会・文化に関する展示、オルガンの仕組みがわかる触れる模型、自由に聴ける音源コーナー等々、他に訪問者もなかったので時間をかけて見学いたしました。バート・ケストリッツは Köstritzer Schwarzbierbrauerei が有名とのことで、直営ビアハウスで地ビールを楽しみました。

9月21日、マールブルクに到着。いよいよシュッツ・フェストの開幕です。私が今回の大会で楽しみにしていたのはオルガンのコンサートとエクスカーション、そして合唱プロジェクトです。マールブルクでは大学教会、エリーザベト教会、マリエン教会で、そしてリッヒでもオルガンを聴くことができ、オルガニストの私としては楽しかったです。大会のテーマが詩編の音楽だったこともあり、エリーザベト教会でのF. フランメ氏によるコンサートでは、オルガンのための詩編作品が3曲演奏されました。レーガーのコラール幻想曲《われらの神は堅き砦》op. 27、ラインケンのコラール幻想曲《バビロンの流れのほとりにて》、ロイプケの詩編94…と、どれも大作です。フランメ氏の卓越したテクニック、シャープな演奏、エリーザベト教会の超モダンなデザインのオルガン（クライス社、2006年）のおかげで、飽きることなく聴くことができました。シュッツ・フェストでレーガーやロイプケを聴くことになるとは思いませんでしたが…。

バスに乗ってのエクスカーションで訪れたリッヒの Marienstiftkirche の歴史は13世紀に遡ります。ここには30年戦争のさなかの1621—1624年にG. ヴァーグナーによって作られたオルガンがあります。Principal 8', Rohrflöte 8', Octave 4', Gedacktföte 4', Superoctave 2' の6ストップのパイプは Hauptwerk の中に現存しているとのこと。ただこの楽器は17世紀から21世紀に至るまで拡大され続け、現在は Rückpositiv も加わり3段鍵盤と足鍵盤で39ストップの規模の楽器になっています。デモンストレーションではオリジナルの個々のパイプの音色を聴くことができました。Rohrflöte 8' の包み込むような柔らかい音色が印象に残っています。コンサートではシュッツの声楽作品と並んでシャイトのオルガン・マニフィカト第6旋法を聴けたのも嬉しいことでした。

合唱プロジェクトでは二重合唱の曲を中心にプログラムが組まれました。ミヒヤエル・プレトリウス、シュッツ、パッヘルベル、ディストラー。シャイトの二重合唱作品を研究する私には、実際に歌う機会を持てたことは大きな収穫でした。またカントルのニルス・クッペ氏の指導ぶり、特に「歌う気にさせる」音楽作り、人への心遣い、立ち振る舞い等々も学ぶことが多かったこともマールブルクの思い出として記しておきたいです。

9月24日朝、エリーザベト教会におけるエキューメニカルな音楽礼拝を以って、マールブルク大会は幕を閉じました。来年はスイス。どのような出会いが待っているのでしょうか…。

遠い昔、私の世代の人達ならどなたも、桃太郎やかぐや姫といった日本の民話を聞く一方、白雪姫や赤頭巾などのグリム童話に親しみながら育ったことでしょう。何故ドイツのお話にはいつも怖い継母がでてくるのでしょうか、暗く寒い森の中で食べ物もなく、虐められる可哀想な子がでてくるのでしょうか、不思議に思いつつ、怖いもの見たさ、聞きたさに一心に読みふけては、涙を拭った経験をお持ちの方も多いのではないでしょうか。

マールブルクは中部ドイツに位置し、列車でフランクフルトから北に約1時間、グリム兄弟の誕生の地ハーナウに近く、兄弟が法学部に学んだ大学街なのです。9月中旬なのに、駅に降り立つとしんしんと寒さを感じます。戦禍を免れた木組みの家が立ち並ぶ旧市街、日本の高山のように深い急勾配の屋根を持つ家々は、冬の厳しさを前提としての知恵の表れなのでしょう。頑丈な革靴や厚手のセーターなどが早々と店のショウウィンドウを飾り、暖かいスープを入れるのに丁度よい陶器などが、この地の気候を物語っているようです。グリムのお話の舞台を髣髴とさせる佇まいです。ちょっと旧式な建物ながら、暖かいおもてなしを心得たホテル、マールブルガー・ホーフから会場に通う道はアップ・ダウンが厳しく、小山をひとつ越えるような難路。年寄りには酷な街です。事実街中に住むのはほとんど学生でしょうか。彼等が団欒するに相応しそうなカフェや、量が多く安価なレストランが沢山あります。今でも学生シュッツがどこからか現れてきても、ビックリしたりしないでしょう。暖房ひとつをとっても、薪を燃やして暖を取り、かじかんだ手に息を吹きかけて、温もりを取ったはず。この急階段を上り下りして大学に通ったはず。または酒場で音楽や信仰に関して、口角泡を飛ばして議論をしたはず。事実今日でも、学生や若者はカフェに集まって、詩の朗読会等を盛んに行っているそうです。古い町並みの残る場所はどこにもありますが、これほどまとまって残っているのを見ると、ドイツ全体に及ぼされた第二次戦争の被害の大きさを、今更ながらに感じます。それと共にこのように厳しい寒さと、太陽の恩恵少ない薄暗い地方から、アルプスを越えて光と色に満ちたイタリアに辿り着いた、北国の若者の解放感と安堵を思います。

さて今回この街に集まったメンバーとその同伴者は全体で70名、ドイツから51名、続いて日本から7名、スウェーデンとアメリカから各3名、スイス、オランダから各2名、イギリスとフランスからは各1名でした。開催の責任者となったのはマールブルク大学名誉教授のアウミュラーさんでした。氏は解剖学と細胞生物学を専門となさり、日本の北里研究所と協力して仕事をしたこともあるとのこと。また音楽に関しては、ヘッセンとウェストファーレンのオルガンの調査などに関する著書が出版されておられます。昨年参加者が少なく、寂しかったデン・ハーグ大会から早急に、協会の基盤を盤石なものとするべく、八面六臂のお働きでした。ホテルへは宿泊にあたっての特別料金の計らいに関する交渉、開会式やコンサート、シンポジウムの会場との折衝、自らはシンポジウムでの発表、方伯城での展示物やオルガンの説明等々。マールブルクというシュッツ縁りの地での開催ということもありますが、本部事務局を収めるシュルックヴェルダーさんとの共同作業も素晴らしく、早めの広報が功を収めた感もあります。

さて本フェストの全体の流れは、各人の体験談を通して、ほぼお掴みいただいたことでしょう。でも大会の核のひとつであるべきシンポジウム「シュッツのダヴィデ詩篇集に関して」では、どのようなことが話題になったのでしょうか。シンポジウムはまさに満員の特急列車に乗っているような具合で進行します。言葉が通じなくて、今まで自分は何をやっていたのであ

うと、がっくりする瞬間です。しかしそれはどうも言語能力の問題ではない、ということが分かりました。同席のドイツの方も皆さん、同じようなことをおっしゃるのです。あまりのスピードで、できるだけ多くのことをしゃべろうとなさるので、聞いたばかりの事もずりりと滑り落ちてしまうのです。ハンドアウトなどもいただけません。しかし何方かが質問をなさったり、ちょっと話が止まった場合には注意が集中します。そのような時のエピソードをほんの少しお伝えしましょう。シュッツはイタリアで出会った恩師の他に、どのような人と関わりを持ち、影響を受けたのでしょうか。ドレスデン宮廷での前任者ミヒャエル・プレトリウス(1571-1621)とは、会ったことはあるのでしょうか。イタリアの新しい音楽様式を一生懸命に学んだプレトリウス、多くの作品集を出版した音楽家ですから、両者がどの程度直接的な関係をもったかは、非常に興味深いものがあります。しかしこの課題への決定的な回答は見出せませんでした。彼等の関係は、ニアミスばかり犯していた状態であったようです。

さてはて詳細な作品分析を紹介したある発表者に対する質問に答えて、楽譜がプロジェクターで示された時のことです。シュッツ全集には旧全集、新全集、そして一番新しく刊行が始まったばかりのCarus社版があります。旧全集は音部記号等が昔の書き方のままなので、今日の音楽家が演奏で使用するのに難しさがあります。新全集は実践に供する目的を前面にだして、読みやすいように書き換えが行われています。単に書き方を現代風にするだけでは、現在のピッチで演奏すると音域が合わない等、様々な問題が生じます。そこで移調を施してでも、まずは音にしてみよう、という視点で編纂がされています。しかし学問、実践が大きく展開、発展して、この版の問題が浮彫にもされています。それを解決するように、あらたに出版が始まっているのが、Carus版ということになりましょう。いずれの版もまさに時代の産物といえましょう。シュッツの作品を演奏するには、多くの問題が未解決です。聴衆の中からは中全音調律の使用の重要性が強調されました。ルネサンス時代からバロック時代への移行期間の、多くの楽器の研究、製造、実践に関しても、言い出したらきりが無い問題があります。沢山の金管楽器の使用にも対処しなければなりません。演奏ピッチを決め、それに耳も体も合わせることも大変です。本Newsletter紙上では、ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京が12年かけて全曲演奏に挑んだ際、コンサートごとに起こった問題、その解決などに関する淡野氏の、臨場感ある記述が終了した所です。今回の大会でも、様々なアンサンブルの演奏を聴きました。そのいずれのグループもが、シュッツの音楽を演奏するにあたって、自ら解決すべき問題にぶつかっておられることでしょう。学者と実践家がシュッツ縁りの場所で、数日共に過ごすこのような機会こそ、シュッツの音楽を、そのあるべき姿を模索する布石となることでしょう。

さて23日には総会が開催されました。その席上で会長ヴェルベック教授より、正木日本支部長の長らくの御尽力に対する功勞として、花束の贈呈と共に名誉会員に推挙された旨が発表されました。研究者、教育者としても素晴らしいお働きをなさった正木支部長ですが、留学生時代に日本人として初めて、レムゴで開催された大会に参加されたこと、以後ずっと日本支部のためにお働きいただいたことだけでも、名誉会員の榮譽を受ける理由は十分ですとおっしゃられました。この件についてはフレーリヒ前本部事務局長も、蔭から賛同なさり御力添えをくださいました。そしてまだ闘病中でありながら、旦那様共にお祝いにお駆けつけてくださいました。多くの会員から労いと喜びの言葉をかけていただきました。お城の展示やオルガンの見学の後の東の間、日本からの参加者7名が全員揃って、中腹にあるテラスでワイン・グラスを挙げて、お祝いをしました。日本の会員のために長い間お尽いただいたことに対し、感謝の印を差上げることができた嬉しい大会になりました。

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 40 年の軌跡 (18)

会員 淡野弓子

2017 年も 12 月を迎え、これから 16 年前の活動を振り返ろうというわけですが、実は今年の 9 月、シュッツ合唱団は久しぶりにドイツを訪問し、ブラウンシュヴァイク、ベルリン、エアフルトで演奏の機会を持ちました。各都市での詳細は追ってということになるかと思いますが、エアフルトで感じたことだけは今お伝えせねばという気持ちが強く、ここに記しますことをお許し下さい。

エアフルトのアウグスティーナ・カントライが来日し、日本各地で演奏されたのは 2016 年秋のことでした。ドイツ大使館での歓迎レセプションで、私はカントライの指揮者 Prof. Ehrenwerth 氏や団長の Weiß さんと知り合い、私たちシュッツ合唱団もエアフルトで演奏したいとの意志を伝えました。不思議なことに話はトントン拍子に進み、今年の 2 月には、我々のコンサートをプレーディガー・キルヒェの年間プログラムに組み入れて下さるという知らせが届き、日時も 2017 年 9 月 13 日(水)の午後 8 時からと決まりました。

9 月 12 日朝 8 時、オルガンの説明を受けるため教会の正面扉の前でオルガニストの Prof. DreiBig 氏の到着を待つ間、大きな扉に記された文字を見ていますと、扉の左側上部には „das Licht leuchtet in der Finsternis “ とあり、右側中央部には „und die Finsternis hat es nicht erfasst “ と続き、この言葉は迷路のような図案を背景に美しく組み込まれています。左側下部に、MEISTER ECKHART そして左側には 1260-1327 とありました。この教会は 1270 年頃建設され、同じところに修道院も創始されたようですが、ここで修道院長として仕事をしていた人物はなんと中世の神秘主義者マイスター・エックハルトだったのです。扉の言葉は周知の通りヨハネによる福音書 1；5「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」ですが、エックハルトの思索の中核を現すものとのことです。

さて他ならぬハインリヒ・シュッツの音楽には、アウグスティヌス、クレヴオーのベルナルルの瞑想や詩編を歌詞とする歌が多く、これらはシュッツという人の神秘主義的な一面を良く伝えるものと思います。それが後の彼の公教的宣言ともいえる《Geistliche Chormusik 1648》へと進んで行くさまを見るにつけ、その道程を支えるテキストの変化、また作者たちの内奥を流れる水脈にはいつも関心をそそられておりました。即ち、アウグスティヌス、クレヴオーのベルナルル、そしてエックハルトへの流れは、なんとマルティン・ルターへ注ぎ込まれるのです。ルターは法律家になるべくエアフルト大学で学んでいましたが、ある日エアフルト近郊で落雷に見舞われ、ハッと気付いて修道士の道を選びます。ルターの入った修道院はエアフルトの聖アウグスティノ修道会でした。

プレーディガー・キルヒェでのコンサート・プログラムはシュッツに始まりシュッツに終るものでしたが、最初のシュッツはアウグスティヌスの言葉、最後のモテットはルターのコーラル歌詞を選びました。エアフルトゆかりの、イエスの僕として比類なき働きを為したアウグスティヌスとルターに敬意を表してのことです。ここまでは東京で企画していたことでしたが、エアフルトに着き、教会に入ろうとしたその時に、マイスター・エックハルトがふわりと舞い降りて来たのです。それを知った私の驚愕、歓喜は久しく味わったことのないものでした。教会に足を踏み入れると、神を求める歩みのなかで、異端という烙印、破戒僧という汚名を着せ

られ乍らも生き続けた先達たちの信仰が教会の内陣に、オルガン・バルコニーに漂うようでした。今回のエアフルト体験によって私の胸に芽生えたのは、螺旋状に旋回し、これからも決して切れることはないであろう強靱なエネルギーの縄目に私たちも組み込まれた、という確信でした。

前置きが非常に長くなってしまいましたが、これからご報告する 2001 年の出来事は、今回のこの確信に至らせんがための、神の備え給うた一里塚であったことに気付かされたが故のものであります。ご寛恕、ご理解を願って先へ進みたいと存じます。

2001 年は次のようなコンサートで始まりました。

シュッツ全作品連続演奏 [その 27] (12 年計画・最終年)

〈マドリガルと祝婚歌〉 3 月 8 日(木) 19:00 開演 武蔵野市民文化会館小ホール
ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

1. 良い妻を持った夫は幸福である Wohl dem, der ein tugendsam Weib hat (SWV 20)

Capella I Ob 川村正明/ 尾崎温子 MS 石塚瑠美子 T 大森雄治

Capella II S 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 影山智

Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也

2. 恋人よ、甘き悩みのうちに Liebster, sagt in süßem Schmerzen (SWV 441)

Vn I 瀬戸瑤子 Vn II 森田芳子 SI 徳永ふさ子 SII 淡野弓子

Vdg 故・中野哲也 Org.p 菅哲也

3. 徳は最良の友 Tugend ist der beste Freund (SWV 442)

Vn I 瀬戸瑤子 Vn II 森田芳子 SI 徳永ふさ子 SII 石塚瑠美子

Vdg 故・中野哲也 Org.p 菅哲也

4. 4 人の羊飼いの少女たち Vier Hirtinen (SWV Anh. 1)

SI 今村ゆかり SII 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 Org.p 菅哲也

5. 星の見たこと Itzt blicken durch des Himmels Saal (SWV 460)

Ob I 川村正明 Ob II 尾崎温子

SI 今村ゆかり SII 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 影山智

Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也

6. エリコンにおける幸せ Glück zu den Helikon (SWV 96)

大地は自ら呑み Die Erde trinkt für sich (SWV 438)

A(CT) 依田卓 Trbne 飯塚睦彦 Dul 淡野太郎

7. 客たちに告げよ Saget den Gästen (SWV 459)

Vn I 瀬戸瑤子 Vn II 森田芳子 Dul 淡野太郎 S 石塚瑠美子

Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也

～～Pause～～

8. 夜ごとふしどに(第 1 部) In lecturo per noctes (SWV 272)

わたしは夜警に見つかりました(第 2 部) Invenerunt me custodes civitates (SWV 273)

S 徳永ふさ子 A 依田卓 Trbne 飯塚睦彦 Vdg 故・中野哲也

Dul 淡野太郎 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也

9. お願いです、エルサレムの乙女たちよ Ich beschwöre euch, ihr Tochter zu Jerusalem

対話 Dialogus (SWV 339)

- S 徳永ふさ子 Ob 川村正明 S 今村ゆかり Ob 尾崎温子
 A 依田卓 Trbne 飯塚睦彦 Dul 淡野太郎
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也
10. 鷲が絶壁から飛び立つようだ Wie wenn der Adler sich (SWV 434)
 S-Solo 徳永ふさ子 Org.p 菅哲也
11. 見よ、なんと麗しいことか Siehe, wie fein und lieblich ist (SWV 48)
 Vn 瀬戸瑤子 Ob 川村正明 Dul 淡野太郎
 合唱 [SSATB] ハインリヒ・シュッツ合唱団
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也
12. ドイツは苦しい戦さを耐え Teutoniam dudum belli atra pericla morestant (SWV 338)
 Vn I 瀬戸瑤子 Vn II 森田芳子 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org.p 菅哲也
 Concertino SI 今村ゆかり SII 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 影山智/ 大森雄治
 Ripieno ハインリヒ・シュッツ合唱団 [SSATB]
 指揮 淡野弓子

これまでに演奏してきたシュッツの作品はほとんどが宗教曲でした。シュッツの書いた世俗曲は、彼がデンマーク王室の祝祭行事のために書いたものが多く、さらにそのほとんどが1760年のデンマークの城の大火で焼失したと伝えられています。オペラ《ダフネ》やバレエ音楽をもし聴くことが出来たなら、シュッツの像も違ったものになっていたのかも知れません。

このコンサートのタイトル〈マドリガルと祝婚歌〉はシュッツの命名ではなく、したがってこのような曲集が遺されているというわけではありません。この中の „In lecturo per noctes 夜ごとふしどに “ と „Invenerunt me custodes civitates わたしは夜警に見つかりました “ の2曲は《シンフォニエ・サクレ I 1629》の第16、17番に収められていますが、あとは遺された単品の機会音楽を私の考えで集め、このような題をつけたものです。

上記の2曲をはじめ、歌詞は旧約聖書の『雅歌』から取られたものが多く、馥郁たる香りに包まれた愛の世界が意味深長な言葉で語られます。当時は人間同士の「愛の歌」というイメージで歌っていましたが、バッハが《マタイ受難曲》で用いた『雅歌』の扱い方などを考えて行くうちに、この「愛」は神を求める心であり、シュッツの作法にもそれが示されていることにも気付かされております。

4週間後には〈受難楽の夕べ〉が開催されました。

〈受難楽の夕べ〉4月4日(水) 19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

ハインリヒ・シュッツ 《マタイ受難曲》(朗唱=日本語)

淡野弓子 指揮 ハインリヒ・シュッツ合唱団

福音史家 淡野太郎 イエス 小原浄二 ピラト 谷口正 ピラトの妻 石塚瑠美子

ユダ 依田卓 ペテロ 大森雄治 カヤパ 春宮哲 下女 I 今村ゆかり 下女 II 柴田圭子

ヨーゼフ・ハイドン 弦楽四重奏曲《十字架上の七言》

VnI 瀬戸瑤子 VnII 渡邊慶子 Va 浦川宣也 Vc 嶺田健

1999年、私は今は亡き杉山好先生によるバッハ《マタイ受難曲》の、聖書部分が口語訳と

なった新改訳(CD バッハ 2000)に出会い、その踊り跳ねるような一語一語、人物たちの動きを目の当たりにするような斬新な動詞や副詞に強い衝撃を受けました。それは私にシュッツの音楽を思い出させ、この日本語をシュッツの音楽に当て嵌めてみたいという思いに導かれたのです。しかし、日本語の文法は西洋和声を受付けないので、和声進行と日本語訳をピタリと合わせることは至難の技です。そこで、朗唱部分のみを日本語で、合唱部分はドイツ語でという折衷案に落ち着きました。

朗唱部分の一つひとつの音符に日本語を置いて行く作業は淡野太郎に任せ、2000年の受難節、4月14日には本郷教会の〈Soli Deo Gloria 讃美と祈りの夕べ〉において演奏を試みました。聴き手の耳が日本語に吸い寄せられ、その緊張感、集中度が歌い手に跳ね返ってくるという生々しいやりとりのなかでドラマが進行し良い感触でした。

慎重に準備を重ね、1年間あたためてきた試みでしたので当日の演奏も皆様に受け入れて戴き、杉山先生も大変喜んでくださいました。音楽批評紙『ブリーズ』では、「本来のドイツ語の音の魅力をとるか、言葉の意味を直接に伝えるか、難しいけれど、後者を選択したことで物語が真っ直ぐに届けられた意味は大きい」(No. 42 4月15日号)との記事、またアメリカのホームページ [ANDANTE]では、「メサイア」や《第9》の邦訳とは異なり、シュッツにおいては完全なる成功、との見出しのもと、「二人の独唱者の模範的演奏、合唱もこの日選択されたコア・トーン (aはおよそ 466hz) のピッチを確かに保ち・・・」(吉村恒・原文英語) とのコメントは、この冒険的試みと 60分におよぶ無伴奏の朗唱と合唱を正当に評価されたものとして嬉しく思いました。

朗唱部分に日本語が馴染んだのは、まず単旋律であったので、一音ごとの時間の制約から自由であったこと、次にシュッツが非常に大胆かつ劇的に言葉を扱っていること、そして杉山教授の日本語に真の生命が溢れていたからだろうと思います。

プログラム後半はハイドンの弦楽4重奏曲《十字架上の七言》でした。この作品はハイドンがカディスのカテドラルから依頼を受けて作曲されたもので、次のように演奏されたということです。

ビショップが説教台に進み、七言の最初の言葉を朗読、続いて説教に入る。説教が終わると彼は祭壇の前に進みそこで拝礼。ここから、第二の言葉が語られるまで音楽が奏される。ビショップは第二の言葉、そして説教、音楽、第三の言葉、説教、音楽と続く。

このように、この作品はカテドラルの受難節における純粋な教会行事のために書かれたもので、各楽曲はバロック期の音画技法やバッハの凝っていた数の象徴なども取り入れられており、まことに興味深い音楽でした。言葉の内容を忠実に伝えつつも、常にイエスの霊が神の膝に導かれんことをという祈りを基調とし、全体としては慰めに満ちたこの曲は、当夜の名手たちによる渾身の演奏によって、東京カテドラルという空間に新しい響きの可能性を示唆するものでもありました。

そして5週間後のコンサートです。

シュッツ全作品連続演奏 [その 28] (12年計画・最終年)

〈Symphoniae Sacrae II 1647〉5月9日(水) 19:00 開演 ルーテル市ヶ谷教会
ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

1. Verleih uns Frieden われらに平和を(SWV 354) [器楽2声/ 女声2声/ Bc]

Vn 渡邊慶子 Rec 淡野太郎 シュッツ合唱団 [S/ A]

- Vc 大軒由敬 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也
2. Gib unsern Fürsten われらの長に (SWV 355) [器楽 2 声/ 男声 2 声/ Bc]
 Vn 渡邊慶子 Rec 淡野太郎 シュッツ合唱団 [T/ B]
 Vc 大軒由敬 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也
3. Die so ihr Herren fürchtet 神を畏れるあなた方 (SWV 364) [器楽 2 声/ ATB/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介
4. Herr, nun lässest du deinen Diener 主よ、今ここの僕を (SWV 352)
 [器楽 2 声/ B/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 B 石井賢 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也
5. Hütet euch 心せよ (SWV 351) [器楽 2 声/ B/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子 Ob 川村正明 B 石井賢 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也
6. Was betrübst du dich なにを悲しんでいるのか (SWV 353) [器楽 2 声/ SS/ Bc]
 Vn 渡邊慶子 Rec 淡野太郎 S 淡野弓子/ 石塚瑠美子 Vc 大軒由敬 Org 菅哲也
7. Von Gott will ich nicht lassen 私は神から離れない(SWV 366) [器楽 2 声/ SSB/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 シュッツ合唱団 [SATB]
 Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
- ~~Pause~~
8. Nachdem ich lag in meinem ödem Bette 荒涼の床に横たわりしのうち (SWV 451)
9. Lässt Salomon sein Bette nicht umgeben ソロモンに彼の床を囲ませないでよいの
 (SWV 452) [器楽 4 声/ SB (ソロ・合唱)/ Bc] (SWV 451, 452 共)
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Trbne 飯塚睦彦 Dul 淡野太郎 シュッツ合唱団 [S/ B]
 S 今村ゆかり/ 柴田圭子 B 石井賢 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治
 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
10. Von Anfang der Sonnen 日の出るところから (SWV 362) [器楽 2 声/ BB/ Bc]
 Vn 渡邊慶子 Rec 淡野太郎 B 阪本一郎/ 石井賢 Vc 大軒由敬 Org 菅哲也
11. Lobet den Herrn in seinem Heiligtum その聖所で主を誉めたたえよ (SWV 350)
 [器楽 2 声/ T/ Bc] Vn 瀬戸瑤子 Ob 川村正明
 T 淡野太郎 Vne 西澤央子
 Cemb 岡田龍之介
12. Lobet den Herrn alle Heiden もろもろの民よ、主を誉めたたえよ (SWV 363)
 [器楽 2 声/ ATB/ Bc] Vn 瀬戸瑤子 Ob 川村正明 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介
13. Lasset uns doch den Herren, unsern Gott loben 主なる神を称えよう (SWV 407)
 [器楽 2 声/ SSTB(ソロ)/ SATB(合唱・器楽付)/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 S 今村ゆかり/ 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢
 シュッツ合唱団[SATB] Ob 川村正明 Trbne 飯塚睦彦 Vc 大軒由敬
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也

〈Symphoniae sacrae シンフォニエ・サクレ〉については前回 (17)でも述べましたが、宗教的な内容を持ち器楽が共に奏される曲集で、シュッツはこのタイトルで三巻の作品集を遺し

ています。第一巻はラテン語のテキストによる 20 曲、第二巻はドイツ語のテキストによる 27 曲、第三巻もドイツ語で合唱も加わった大きな編成のコンチェルト 21 曲です。歌唱も器楽演奏も非常にレヴェルの高い音楽で、良い演奏に向けては何日もの合宿が必要かと思われます。

この日のタイトルは〈Symphoniae sacrae II 1647〉となっていますが、正確には、1647 年のシンフォニエ・サクレ II からドイツ語によるコンチェルト 10 曲、および 1650 年のシンフォニエ・サクレ III から 1 曲(ドイツ語)、マルティン・オーピッツ翻案の『雅歌』よりの器楽付きマドリガル 2 曲が演奏されました。言葉を音で表現することに生涯をかけたシュッツは、楽器にも言葉の形や意味内容を雄弁に語らせています。器楽は伴奏や飾りではなくともに言葉を表現する器として用いられており、人の舌が語ったことがそのまま楽器の音に移行するさまは見事というほかありません。

連続演奏も終盤戦に入り、初めて演奏する曲ばかりとなったこの頃、私は「皆さん、頑張ってください。もう直き終ります。もう直き・・・」と繰り返し叫んでいたように思います。しかし慰めというよりは激励といったシュッツの音楽は身体全体を貫く強い力に溢れ、彼の音楽に落胆したことは 1 度もありませんでした。

4 週間後、30 回を最終回と決めたシリーズの第 29 回目のコンサートが開催されました。シュッツ全作品連続演奏 [その 29] (12 年計画・最終年)

〈聖霊降臨祭の音楽 2001〉6 月 6 日(水) 19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂
ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

1. Der Gott Abraham 頌榮：アブラハムの神よ (SWV Anh. 3)

[器楽 5 声 (+合唱 4 声/ 声楽 3 声 ATB/ Bc)]

Vn 瀬戸瑠子/ 渡邊慶子 Trbne 飯塚睦彦/ 故・利根川勝/ 喜多原和人

A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢 Vc 大軒由敬 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也

シュッツ合唱団

2. Freue dich des Weibes deiner Jugend あなたの青春の妻を喜べ (SWV 453)

[器楽 5 声/ 4 声のソロと合唱/ Bc]

Vn 渡邊慶子 Cto 濱田芳通 Trbne 飯塚睦彦/ 故・利根川勝/ 喜多原和人

S 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢 シュッツ合唱団

Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也

3. Haus und Güter erbet man von Eltern 家と富は両親から受け継ぐもの (SWV 21)

[3 群のアンサンブル:SSB/ T (器楽 2 群/ Bc)]

第 I 群 S 今村ゆかり/ 柴田圭子 B 石井賢

第 II 群 Vn 瀬戸瑠子/ 渡邊慶子 Va 森田芳子 T 淡野太郎

第 III 群 T 星野正人 Trbne 飯塚睦彦/ 故・利根川勝/ 喜多原和人

Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也

4. Danklied 感謝の歌 (SWV 368) [器楽 2 声/ T-Solo/ Bc]

T-Solo Zeger Vandersteene

Rec 濱田芳通/ 淡野太郎 Vne 西澤央子 Cemb 岡田龍之介

5. Drei schöne Dinge sind 麗しき三つのこと (SWV 365) [器楽 2 声/ TTB/ Bc]

Vn 瀬戸瑠子 Cto 濱田芳通 T Zeger Vandersteene/ 淡野太郎 B 石井賢

Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Org 菅哲也

6. Hütet euch, dass eure Herzen あなた方の心に注意せよ (SWV 413)
 [器楽 2 声/ 6 声合唱/ Bc]
 Vn 渡邊慶子 Cto 濱田芳通 Vc 大軒由敬 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介
 シュッツ合唱団
7. Wo der Herr nicht das Haus bauet 主ご自身が建ててくださるのでなければ(SWV 473)
 [器楽 5 声/ 声楽 5 声/ 4 声合唱/ Bc]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Trbne 飯塚睦彦/ 故・利根川勝/ 喜多原和人
 S 今村ゆかり/ 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢
 Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
 ～～Pause～～
8. Singet den Herrn, ein neues Lied 歌え、主に向かつて新しき歌を (SWV 342)
 [器楽 2 声/ T-Solo/ Bc] T-Solo Zeger Vandersteene
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
9. Der Herr ist mein Licht und mein Heil 主はわが光、わが救い (SWV 359)
 [器楽 2 声/ TT/ Bc] Vn 瀬戸瑤子 Cto 濱田芳通
 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介
10. O du aller süßester und liebster Herr Jesu おおこよなく甘美な最愛のイエスよ
 (SWV 360) [器楽 2 声/ 声楽 5 声/Bc] Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子
 S 淡野弓子/ 石塚瑠美子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢 Vc 大軒由敬 Org 菅哲也
11. Komm, heiliger Geist 来れ、聖霊よ (SWV 417)
 [器楽 2 声/ 声楽 6 声/ 2 群の合唱 (SATB・SATB/ Bc)]
 Vn 渡邊慶子 Cto 濱田芳通 S 今村ゆかり/ 石塚瑠美子 A 依田卓
 Trbne 飯塚睦彦 Bar 淡野太郎 B 石井賢
 Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
 シュッツ合唱団
12. Auf dich, Herr, traue ich 主よ、わたしはあなたに依り頼みます (SWV 462)
 [器楽 7 声/ 2 群のソロと合唱 (SATB・SATB/ Bc)]
 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Va 森田芳子 Cto 濱田芳通
 Trbne 飯塚睦彦/ 故・利根川勝/ 喜多原和人
 第 I 群 S 柴田圭子 A 石塚瑠美子 T Zeger Vandersteene B 石井賢
 第 II 群 S 今村ゆかり A 依田卓 T 淡野太郎 B 阪本一郎
 Vc 大軒由敬 Vne 西澤央子 Kb 西澤誠治 Cemb 岡田龍之介 Org 菅哲也
 シュッツ合唱団

この回と最終回にはベルギーの高名なテノール歌手、ツェーガー・ファンダステーネ氏が歌って下さいました。ヨーロッパではシュッツ作品をお歌いになる機会がほとんどおありにならないとのことで、ツェーガー先生は私たちの活動を応援して下さり、1999 年にも共演していただきました。広い音域、ゆったりとした暖かいお声、温厚なお人柄に多くの人々が魅かれ、このあとも幾度となく一緒に歌って下さいました。記憶にない程の回数です。プログラムは器楽編成を伴った大規模な曲が多く含まれ、繊細かつ重厚な特の和声の響きに圧倒されました。

そして悲報です。クラシックからジャズ、そして古楽まで、どんなピッチでも軽々と演奏し

てくださった利根川勝さんは2014年9月14日、急性大動脈破裂によって56歳の若さで急逝されました。淡々としたお人柄でいつも風のように練習場に入られ、どんな譜面でもニコニコとこともなげに奏され誰もが信頼する音楽家でした。まだどこかに居られるような・・・又お会いしましょう。

7月、「蘆野ゆり子カリグラフィー展」が、ザクセン州立ルター派福音教会局文化部の正式行事として、ドレスデンのクロイツ教会で開催の運びとなり、7月12日のオープニングで演奏のため、「タブラ・ラサ」の名で何度か演奏会を開いたア・カペラのソロ・アンサンブル（S 淡野弓子/ MS 石塚瑠美子/ CT 依田卓/ T 淡野太郎/ B 石井賢）がドイツに向かいました。

蘆野ゆり子は18歳よりおよそ30年間シュッツ合唱団員として多くの作品を歌い、その歌のテキストがカリグラフィー作品として花開いたのです。クロイツ教会に入った左手の一角に展示された作品はすべて音楽に触発されて制作されたことが分かります。ドイツの鑑賞者たちはこの音なき演奏ともいうべきユニークな世界に尋常でない関心を示し、一様に感動の面持ちでした。私たちアンサンブルはこれらの作品の元となった音楽を演奏したわけですが、カリグラフィーと音楽の呼応という新しい世界は実にエキサイティングでした。

この旅では、マンハイム近郊のシッファースシュタット、シュパイアー、ヴァインハイムの教会でもコンサートが持たれ、マンハイム・オペラのコンサートマスターをしておられたディートリヒ・ブラウアー氏のヴァイオリンとともにヘンデルのドイツ・アリアなども演奏しました。さらにドレスデンでは三王教会でコンサート、15日の日曜日にはエルベ河畔のマリア・アム・ヴァッサーにおいてシュッツの〈ドイツ（語）・ミサ〉を礼拝式に添って歌うことが許されました。この礼拝では二人の姉弟牧師が奨励「シュッツについて」と説教「詩編110編（ドイツ・ミサの終曲のテキスト）」をしてくださったのです。

その後ベルリンに行きツィンク奏者のホルガー・アイヒホルン氏を訪問、氏は濱田芳通さんの師であるブルース・ディッキーを育てた方で、16、17世紀音楽の専門家です。ラッソ、シュッツ、モンテヴェルディ、ローゼンミュラー、プレトリウスらの全作品が並ぶ書棚、さまざまな種類の管楽器が掛けられた壁に囲まれた氏のスタジオの印象は強烈で、今でも室内の記憶は鮮明です。

ホルガー氏はベルリーナー・コンパナイを組織し、念のいった演奏、録音活動をしておられました。氏は私たちのシュッツ連続演奏に強い興味を示され、ついには連続演奏最終回となる10月1日には私も東京で演奏しようか、という話にまで発展したのでした。

「シュッツ全作品連続演奏」が始まった1989年はベルリンの壁が開いた年でした。幸先の良さに喜んでいたものの、この連続演奏が戦争によって中断することのないように、とそればかり祈っていた12年でした。その最終回を迎えようという3週間前の9月11日、飛び込んできたのはアメリカ同時多発テロのニュースだったのです。

10月1日の演奏者のうち4人は外国在住者だったため、まずは皆が無事に日本に到着出来るのかどうか心配でした。ヘント在住のファンダステーネ氏は流麗な筆致で到着日、練習日時確認のファックスをくださいました。ロンドンの市瀬礼子さんは幾度となくメールをくださり、ピッチやスケジュールの相談をしました。「行かれるかどうか分からない」と言ってきたのはミネアポリスの淡野桃子でした。桃子の歌う箇所は最悪の場合すべて淡野弓子が歌うとの覚悟を決め、最後はベルリンのアイヒホルン氏です。氏とは楽器編成のことなど再々連絡をと

っていたのですが、氏の出発2日前、「病気のため日本へは行けぬ。残念至極。」とのファックスが。すぐに飯塚睦彦さんと連絡を取りツインク III のパートをアルト・トロンボーンで演奏してもらえるかどうかを確認し、濱田芳通さんにことの次第を話しますと、お弟子さんの中村孝志さんが来てくださることとなり、ここに濱田、中村、細川三氏のツインク三声が揃ったのでした。

シュッツ全作品連続演奏 [その 30] (最終回)

〈満願の献げ物〉 10月1日(月) 19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂
ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

1. Jauchzet dem Herrn, alle Welt(詩編 100) (SWV 36) 初稿
全地よ、主に向かって歓呼せよ [三重合唱・ア・カペラ 12 声]
2. Der 116. Psalm Quinta & Ultima Parte (詩編 116, 7-14) (SWV 51)
主の御名を呼び満願の献げ物を主にささげよう [ア・カペラ 5 声]
3. Cantavo Domino in vita mea (詩編 103, 33) (SWV 260) [T 独唱/ 2Vn/ Bc]
T 独唱 ツェーガー・ファンダステアーネ
4. Ich liege und schlafe (詩編 3, 6-9) (SWV 310)
わたしは身を横たえて眠り [B 独唱/ Bc] B 独唱 小原浄二
5. Herr, wie lange willst du mein so gar vergessen (詩編 13) (SWV 416)
主よ、いつまでわたしを忘れておられるのか [2Vn/ 4Gamben/ SSAATB/ Bc・13 声]
S 淡野桃子 S 石塚瑠美子 A 依田卓 A 淡野太郎 T 大森雄治 B 石井賢
6. Attendite populo meus (詩編 78, 1-3) (SWV 270)
わたしの民よ、わたしの教えを聞け [B-独唱/ 4Posaunen/ Bc] B 独唱 小原浄二
7. Wo Gott nicht selbst bei uns wäre (詩編 124) (SWV 49)
主がわたしたちの味方でなかったら [T+3Zinken/ T+3Gamben/ SSSB/ Bc・13 声]
T 淡野太郎 T ツェーガー・ファンダステアーネ
S 淡野桃子 S 今村ゆかり S 柴田圭子 B 石井賢
8. Domini est terra (詩編 24) (SWV 476)
地とそこに満つるものは主のもの
[2Zinken/ 5Gamben/ 2Vn/ 4Posaunen/ 合唱 2 群/Bc 23 声]
CHORUS I S 今村ゆかり A 石塚瑠美子 T 星野正人 B 小原浄二
CHORUS II S 柴田圭子 A 依田卓 T 大森雄治 B 石井賢
～～Pause～～
9. Vater Abraham, erbarme dich mein Dialogus (ルカ 16, 24-31) (SWV 477)
父アブラハムよ、わたしを憐れんでください [2Vn+T 独唱/ 2F1+B 独唱/ SSA/ Bc]
T 独唱(アブラハム) ツェーガー・ファンダステアーネ B 独唱(裕福な男) 石井賢
S 今村ゆかり S 柴田圭子 A 依田卓
10. Es gingen zween Menschen Dialogus (ルカ 18, 10-14) (SWV 444)
パリサイ人と徴税人(二人の人が神殿にのぼり) [S2 重唱/ TB 2 重唱 (SATB)/ Bc]
T 独唱(徴税人) ツェーガー・ファンダステアーネ B 独唱(パリサイ人) 小原浄二
11. Ach wie soll ich doch in Freuden leben (マドリガル詩・独訳) (SWV 474)
ああ、どのように楽しく生きるべきか

[3 Gamben/ 3 Posaunen/ Cem/ Vn・Zink/ TTB/ Bc]

A 依田卓 T 栗川祐介 B 石井賢

12. Wo Gott der Herr nicht bei uns hält (詩編 124 によるコラール Justus Jonas 詞)
(SWV 467/2)

主の支えなかりせば [S・Cemb/ S 3 Gamben/ S 3 Posaunen/ Bc・10 声]

S 淡野桃子 S 石塚瑠美子 S 柴田圭子

13. Klaglied 1625 (SWV 501)

哀歌(シュッツの妻マクダレーナの死に寄せて[T 独唱/ Bc])

T 独唱 ツェーガー・ファンダステーネ

14. O bone Jesu, fili Mariae (Bernhard:Clavivaux/ Augustinus/ Schütz) (SWV 471)

おお善意にみちたイエス、14 マリアの御子よ [2Vn/ 4 Gamben/ Vne/ SSAATB/ Bc・14 声]

S 淡野桃子 S 石塚瑠美子 A ツェーガー・ファンダステーネ A 依田卓

T 淡野太郎 B 石井賢

15. Surrexit pastor bonus(イースター第二日目の Responsorium) (SWV 469)

善き羊飼いは甦りたまいぬ [2Vn/ 3 Posaunen/ 合唱 2 群/ SSATTB/ Bc・20 声]

S 今村ゆかり S 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 T 小原浄二 B 石井賢

16. Es erhob sich ein Streit im Himmel (ヨハネ黙示録 12, 7-12) (SWV Anh. 11)

天に戦いが起こり [3 Zinken+T 独唱/ Trp+T 独唱+3 Gamben/ 合唱 2 群/ Bc・18 声]

Coro I S 淡野桃子 A 依田卓 T 星野正人 B 石井賢

Coro II S 柴田圭子 A 石塚瑠美子 T 大森雄治 B 小原浄二

Coro III T 淡野太郎

Coro IV T ツェーガー・ファンダステーネ

17. Gesang der drei Männer im feurigen Ofen (讃歌) (SWV 448)

燃え盛る炉の中の三人の男の歌

[2Vn/ 3 Gamben/ 2 Zinken/ 3 Posaunen/ SSATB/ Bc・16 声]

S 今村ゆかり S 柴田圭子 A 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢

指揮 淡野弓子

特別出演 ツェーガー・ファンダステーネ(ヘント)テノール

Zeger Vandersteene (Gent) Tenor

アンサンブル・サギタリウス

ソプラノ: 淡野桃子/ 今村ゆかり/ 柴田圭子

メゾソプラノ: 石塚瑠美子 アルト: 依田卓

テノール: 淡野太郎/ 星野正人/ 大森雄治 バス: 小原浄二/ 石井賢

ツィンク: 濱田芳通/ 細川大介 ナチュラル・トランペット: 小林好夫

バロック・トロンボーン: 飯塚睦彦/ 萩谷克己/ 故・利根川勝/ 喜多原和人

バロック・ヴァイオリン: 瀬戸瑤子/ 小野万里

ヴィオラ・ダ・ガンバ: 桜井茂/ 市瀬礼子/ 故・中野哲也

バロック・チェロ: 大軒由敬 ヴィオローネ: 西澤央子 コントラバス: 西澤誠治

ドゥルツィアン: 淡野太郎 チェンバロ: 岡田龍之介 ポジティブ・オルガン: 菅哲也

ハインリヒ・シュッツ合唱団 (10/1 出演者)

ソプラノ I 今村ゆかり/ 入江菜/ 大淵久美子/ 大森純子/ 齋藤嫩子/ 柴田圭子/

瀬尾文子/ 巽瑞子/ 玉井千恵/ 西川真理子
 ソプラノ II 石塚瑠美子/ 齋藤知子/ 阪本恭子/ 島崎伸子/ 中村美穂/ 松井美奈子/
 湊岑子/ 故・毛利忍/ 山田由紀子
 アルト 秋山百合子/ 影山照子/ 佐藤道子/ 塩谷和子/ 田畑玲子/ 中江紗智子/
 中村康子/ 故・野間明子/ 三好愛子
 テノール 大森雄治/ 故・齋藤公治/ 笹井宏益/ 星野正人/ 淡野太郎/ 依田卓
 バス 石井賢/ 栗川祐介/ 阪本一郎/ 谷口正/ 中村誠一/ 春宮哲/
 向樹生/ 渡辺功一

世界中が悲しみにくれていました。9.11以来、人々は突然襲ってくる無力感、気が付くと鳥肌の立っている身体、叫び出したい気持ちなどと戦う毎日でした。今考えると、こんな非道い状態でよくもコンサートが成立し、しかも成功裏に終了したのか、常識を超える出来事でした。

10月1日、伝説的雨女である私に天が味方してくれたのか、この日もザアザア降りでした。しかしお客様はぞくぞくと次から次へお見えになり、カテドラルは補助椅子も並ぶ満席。シュッツの音楽を聴こうという方々がこれ程いらしたのか、という驚きと喜びに包まれ第一曲 „Jauchzet dem Herrn, alle Welt 全地よ、主に向かって歓呼せよ“ (詩編100) が歌い出されました。《ダヴィデの詩編曲集 1619》第15番の初稿で三重合唱・ア・カペラ 12声の作品です。第一合唱のソロアンサンブルはオルガン・バルコニー、第二、第三合唱は正面左右に立ちました。連続演奏第1回を《ダヴィデの詩編曲集 1619》全26曲で始めたので、この最終回に若かりしシュッツにまみえたことを嬉しく思いました。彼がどれ程の思いでヴェネツィアの複合唱の技法にドイツ語のテキストで立ち向かったのか、想像するだに胸が熱くなります。

第二曲目は最終回のタイトルとなった〈満願の献げ物〉という言葉の出で来る《詩編116》の第5、6番(最終曲)を演奏しました。ルター訳の聖書では „Gelübde bezahlen 神への誓いを償う“とあり、文語訳聖書では「誓いをつくのはん」、口語訳では「誓いをつぐなおう」、そして1987年の新共同訳に至って「満願の献げ物を主にささげよう」との言葉となります。同じ言葉とはいえ「誓いを償う」とは厳粛な表現、今となってもまだ緊張の続く思いです。

後半は結婚6年にして伴侶を失ったシュッツの亡き妻への哀悼歌をツェーガー 先生が感動的に歌い上げて下さり、多くの方が共感のお便りを寄せて下さいました。またあまりの大編成に恐れをなし、演奏を先延ばしにしていた „Es erhob sich ein Streit im Himmel 天に戦いが起こり“ (ヨハネ黙示録12, 7-12) (SWV Anh. 11) [3 Zinken+T 独唱/ Trp+T 独唱+ 3 Gamben/ 合唱2群/ Bc・18声]という大天使ミカエルと龍との戦いの音楽や、„Gesang der drei Männer im feurigen Ofen 燃え盛る炉の中の三人の男の歌“ (讃歌) (SWV 448) [2Vn/ 3 Gamben/ 2 Zinken/ 3 Posaunen/ SSATB/ Bc・16声]を演奏出来たことは、今も不思議に思えてなりません。

この夜は偶然とはいえ様々なジャンルのシュッツ音楽をご紹介することが出来たように思います。

当日のプログラム紙上には今は亡き服部幸三先生が暖かいお言葉をお寄せくださり、私も感謝の気持ちをお伝えいたしました。別刷りにしてお届け致します。

このあと12月まで2、3の催しが続きましたが、字数も多くなりましたので次回に回したいと思います。[続く]

2001年〈SDG〉の記録(日付のみ)：

1/20, 1/27, 2/3, 2/10, 2/17, 2/24, 3/3, 3/10, 3/17, 3/24, 3/31,
4/7, 4/14, 4/21, 4/28, 5/5, 5/12, 5/19, 5/26, 6/2, 6/9, 6/16, 6/23, 6/30

～夏休み～

10/6(♯テロ犠牲者を悼んでシュッツ《音楽による葬送》を歌う), 10/13, 10/20, 10/27,
11/3, 11/10, 11/17, 11/24, 12/1, 12/8, 12/15, 12/22

以上36回 いずれも土曜日18:00より。

8/19(日) 17:00 本郷教会サマー・チャリティ・コンサート

12/24(土) 17:00 本郷教会クリスマス・チャリティ・コンサート 以上。

会員の活動状況

お申し出いただいたもの、編集委員がネット等を通して見つけたもの等で、2018年前半の活動の内、特にシュッツの周辺、バロック音楽等に関わるものを中心にお知らせしています。イベント、コンサート、講演、出版物等の御紹介です。なお出版物に関して入手可能なものに関しては、既刊のもの、予定のもの等を含め、比較的最近のものを御紹介しております。イベントやコンサートに関しては、年2回のNewsletter発行と日程が合わず、お知らせが間に合わなかったものもありますが、御理解のほどお願いいたします。

会員名あいうえお順に御紹介させていただきます。

1) 荒川恒子(お問い合わせ eterna@nifty.com)

- ・2017年12月山岡重治編『J. J. クヴァンツ：2本のリコーダーのための6つのデュエット 作品2』(全音楽譜出版社)発行。(クヴァンツのオリジナル序文翻訳)
- ・2018年4月28日(土)―4月30日(月・祭) 古楽フェスティヴァル〈山梨〉(含む第31回国際古楽コンクール〈山梨〉)開催(実行委員長として企画、運営)
- ・2018年5月1日(火)、2日(水) 国際古楽コンクール〈山梨〉審査員 Robert Hill 氏によるチェンバロ・マスターコース 於：聖グレゴリオの家(企画・運営)
- ・2018年7月5日(木) 於：近江楽堂、7月12日(木) 於：山梨県立図書館多目的ホール「ムジカ エテルナ 甲府」第92回定期演奏会(企画・構成・演奏)

2) 石井 賢(お問い合わせ ishiim@tkg.att.ne.jp)

- ・日本語版CD解説

① J. S. バッハ：ヨハネ受難曲 (P. ドンブレヒト指揮 イル・フォンダメント) (PSC912)

2017/8

- ② G. F. ヘンデル: メサイア(1754年捨て子養育院版)(ニケ指揮 コンセール・スピリチュエル)(Alpha 362) 2017/9
- ③ J. S. バッハ: マニフィカト/ G. F.: ディクシット・ドミヌス(ムニエ指揮 ヴォックス・ルミネス)(Alpha 370) 2017/11
- ・2018年1月14日 於: 浜離宮朝日ホール
ヘンデル・フェスティバル・ジャパン公演 ヘンデル: テオドーラ出演
- ・2018年3月24日 於: 所沢市民文化センター
ミューズオルガンスクール修了演奏会出演
- ・2018年3月25日 於: 八ヶ岳やまびこホール
ブクステフーデ: 我らがイエスの四肢出演
- 3) 今井奈緒子
 - ・東北学院大学宗教音楽研究所所長として、年間と通して公開講座「オルガン演奏法」「学生のためのオルガン演奏法」、その他の学内コンサートを企画・演奏、紀要を発行(<http://www.tohoku-gakuinn.ac.jp/>)
 - ・2018年2月22日(木) 19:00 於: 近江楽堂
F. クープラン生誕350年記念《レソン・ド・テネブル》(オルガン演奏)
チケットお問い合わせ オフィス・サワイ Tel 042-394-9199, info@officesawai.com
- 4) 木村佐千子
 - ・2014年6月 論文「J. S. バッハの2部構成のカンターター概観」『獨協大学ドイツ学研究』(キルステン・バインヴェルガー先生追悼号) 第68: 71-114.
- 5) 佐藤康太
 - ・Sato, Kota. "Telemanns Notenstich und die Chronologie seiner Werke". In: *Vom Umgang mit Telemanns Werke einst und jetzt: Telemann-Rezeption in drei Jahrhunderten: Bericht über die Internationale Wissenschaftliche Konferenz, Magdeburg, 15. und 16. März 2012, anlässlich der 21. Magdeburger Telemann-Festtage*, hrsg. von C. Lange u. B. Reipsch, Hildesheim u. a. 2017 (Telemann-Konferenzberichte Bd. 19) pp. 58-66.
- 6) 佐藤 望
 - ・2017年4月『バロック音楽を考える Rethinking Baroque Music』(音楽之友社)発行
 - ・2018年1月13日(土) 於: 日本キリスト教団阿佐ヶ谷教会
講演「バッハ時代のオルガン音楽はどのように『神学的に』解釈されたかー論争と芸術の狭間をめぐって」(<https://japanorgansociety.wordpress.com/>)
 - ・2018年2月6日(火) 18:30 於: 協生館 藤原 洋記念ホール
(お問い合わせ 045-566-1359 慶応大学日吉音楽学研究室)
G. F. ヘンデル: メサイア(慶応義塾大学コレギウム・ムジクム、アカデミー声楽アンサンブル若手、エキスパート演奏家によるコラボレーション)(指揮)
- 7) 淡野弓子 (お問い合わせ ムジカ・ポエティカ Tel 03-3998-8162)
 - ・ハインリッヒ・シュッツ合唱団 創立50周年記念演奏会
 - ① 2018年1月14日(日) 14:00 於: 練馬文化センター つつじホール

J. ハイドン: 天地創造

② 2018年3月23日(金) 19:00 於: 東京カテドラル聖マリア大聖堂

H. シュッツ: カンツィオーネス・サクレ 1625 より受難モテット

J. S. バッハ: オルガン小曲集 より受難節のコラール(コラール唱付)

H. シュッツ: マタイ受難曲

・2018年2月16日(金) 15:30 - 17:00 於: 朝日カルチャーセンター立川教室

朝日カルチャーセンター立川「ヨーロッパ音楽とキリスト教」

ーリズム・メロディ・ハーモニーの働き

(申込み 朝日カルチャーセンター立川 042-527-6511)

8) 中川郁太郎

・2017年12月15日(金) 18:00-20:00 於: 東北学院大学土樋キャンパス

第68回公開東北学院大学クリスマス 《メサイア》(指揮)

・2018年1月14日(日) 14:00 於: 練馬文化センター つつじホール

ハインリッヒ・シュッツ合唱団 創立50周年記念演奏会

J. ハイドン: 天地創造 (ラファエル役で出演)

9) 橋本周子

・聖グレゴリオの家宗教音楽研究所所長として、年間を通してゼミナール、チャリティコンサート、講演等を企画・指導 (<http://www.st-gregorio.or.jp/> を御覧ください)

10) 米沢陽子

・2018年3月3日(土) 15:00 - 17:00 於: 日本聖公会聖パウロ協会

研究発表と演奏「ザムエル・シャイトの初期複合唱作品《カンツィオーネス・サクレ》(1620)

について—その音楽様式、コラール編曲技法、鍵盤作品集《タブラトウラ・ノヴァ》への影響」(<http://japanorgansociety.wordpress.com/> を御覧ください)

事務局より

・すでに一斉メールでお問い合わせし御賛同いただきましたように、国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュースは、第21号より日本支部 Newsletter と名称変更させていただきます。

・本部では2017年3月13日にカッセルで役員会を開催し、マールブルクにおけるシュッツ・フェストの内容、フェストの準備状況等に関する確認や議論が行われました。決定されているのは、2018年チューリヒ、2019年カールスルーエ、2020年レムゴでの開催です。

・『アクタ・サギタリアーナ』の内容を大幅に変更することを検討中とのこと。また今後は紙媒体ではなく、本部のホームページの Newsletter に掲載予定。しかし会員の年齢構成を考慮し、急激な変化ではなく移行期間を設けるとのことです。

・『シュッツ・ヤールブーホ』がデジタル化されました。ザクセン州立、大学図書館のホームページ上で(<https://www.slub-dresden.de> の表ページから Recherche - Zeitschriften - Elektronische Zeitschriften (EZB) - Fachgebiet - Musikwissenschaft - Schütz-Jahrbuch)と辿りますと、全文がダウンロードできます。なお出版社との契約により、発刊から5年経てからデジタル化されます。従って目下は Bd. 1(1979)から Bd. 34(2012)までをお読みになれます。また協会のホームページ上に、詳細なシュッツ関係の文献表が掲

載されています。号を改めて御紹介させていただきます。

- ・来年のシュッツ・フェストはチューリヒで11月1日—4日まで開催されます。本年はルター記念祭に纏わり、多くの催しが企画されました。スイスには多少立場が違いますが、ツヴィングリとカルヴァンという宗教改革者がいることは、皆様の御存じの通りです。チューリヒで活動したのがツヴィングリです。カトリックとプロテスタントの狭間の様々な観点から、シンポジウム、コンサート開催、またベネディクト派修道院で、特に素晴らしい図書館で知られているアイスレーベンへの小旅行が予定されています。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

支部長 正木光江

事務局長 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部 Newsletter 編集 荒川恒子